

チャイルドサイエンス, 2018, 16, 19-24

《特集》研究論文

就学移行期における子どものQOLの発達と 関連要因の検討

— 親の自尊感情・養育態度との関連を中心として —

眞榮城和美(白百合女子大学)

酒井 厚(首都大学東京)

要約

本研究は、就学移行期の子どものQOLの発達とその関連要因について検討することを目的とした。就学移行期の子どもを持つ母親(N=107)を対象として、子どものQOLの発達の変化について検討し、子どものQOLと親の自尊感情・養育態度との関連について検討した。就学前後の得点変化について分析した結果、子どものQOL総得点および6下位領域中の学校(園)生活の得点が就学後に有意に低下していることが示された。また、就学後の子どものQOLと就学前の親の自尊感情の高さ・子どもの主体性を尊重する養育態度との間にポジティブな関連があることが示唆された。

以上の結果を踏まえ、就学移行期に生じる適応上の問題(いわゆる「小1プロブレム」)の発生を予防する家庭教育の在り方や保護者への間接的な支援について論じた。

キーワード: 子どものQOL、母親の自尊感情、養育態度、就学移行期適応、小1プロブレム

問題と目的

就学移行期の適応に関する現状

子どもが小学校就学後に学業や集団活動になじめないなど学校への適応に困難を示す現象、いわゆる「小1プロブレム(新保, 2001)」が注目されるようになって久しい。この間、子どもの就学移行期の適応を促すために、幼児期から児童期への発達の連続性を考慮したさまざまな取り組みが行われてきた。例えば「小学校スタートカリキュラム」(文部科学省, 2008)では、子どもが園や保育所などで体験してきた内容に近い活動を小学校1年生のカリキュラムに取り入れることにより、就学に伴う劇的な環境の変化を和らげる実践が目指されている。しかし、就学移行期の子どもについては、こうした学校適応上の問題に関わる具体的な取り組みも含めた検討(大前, 2015など)が進んでいるものの、精神的・身体的な健康も含めた状態像に焦点をあてた研究はあまり行われていない。小1プロブレムに見舞われる子どもは、学校生活になじめずストレスを感じることで、精神的・身体的な健康状態を損ねることが予想される。また、学業生活にうまく取り組みないことは、自尊感情の低下につながる可能性があるだろう。

そこで本研究では、従来の小1プロブレムとして取り上げられる学校適応ばかりでなく、身体的・精神的

な健康状態や自尊感情なども含めた子どもの普段の生活における包括的な状態像について、就学前後における変化とそれに関わる要因について検討する。

子どもの日常生活における状態像の把握 KINDL^R

子どもの日常生活における包括的な状態像を測る指標の1つにQOL(Quality of Life)がある(例えばLandgraf, Abetz, & Ware, 1996)。子どものQOLを測る尺度としてはKINDL^R(Ravens-Sieberer & Bullinger, 1998)が代表的であり、日常生活における満足度を身体的健康・精神的健康・自尊感情・家族・友だち・学校(園)生活の6領域から評価することができる。本尺度には子ども本人による自己回答用(幼児版はインタビュー形式で回答)と親回答用が存在し、これまで20数か国語に翻訳されている。古荘・柴田・根本・松寄(2014)は、QOL日本語版として幼児版、小学生版、小中学生版それぞれの自己回答用と親回答用を作成し、妥当性と信頼性を確認している。柴田・松寄(2014)は、このKINDL^R日本語版を用いて小学生から中学生にかけてのQOLの発達を検討し、QOLの総得点が低下する傾向にあり、なかでも下位領域である自尊感情の低下が著しいことを示した。

子どものQOLに関わる親側の要因

近年、こうした子どものQOLを促す要因を探索す

る試みとして、家庭環境との関連が検討されている。例えば、子どもの QOL に親の子育て肯定感が関わっているとの指摘(菅原, 2011)や、0歳から2歳の子どもを持つ初産世帯の父母を対象として、子どもの QOL に関連する要因について検討し、発達初期の子どもの生活と心身の状態の良好さは、両親の QOL と関連していたことを報告している研究(菅原, 2015)、5歳から7歳児の親を対象に子どもの QOL に関連する要因を検討し、子どもの QOL の高さには親の QOL の高さおよび子どもの不注意傾向の低さが関連していたと述べている研究(榊原, 2011)などが挙げられる。小学2年生から6年生の子どもを持つ母親を対象に調査を行った柴田(2013)の研究においても、母親自身の QOL が子どもの QOL を正に予測する結果が示されている。

また、子どもの QOL に関わる親側の要因として、親の養育態度との関連性を示す研究もある。世帯収入と子どもの QOL、問題行動との関連について検討した菅原(2012)は、子どもが5歳時点での母親の QOL の低さが養育の質を低下させ、さらに就学後の子どもの QOL の低下に関連していたことを報告している。その背景には、母親の経済的困窮感が存在することにも触れている。

このように、子どもの QOL には、親の子育て肯定感や QOL・養育態度が関わることが示されているが、就学移行期における子どもの QOL についての縦断的研究は未だ少なく、それに関わる要因もわかっていないことが多い。

子どもが小学校に上がる時期における、精神的・身体的な健康や自尊感情などを含めた包括的な状態像である QOL の変化を知ることは、学業や集団活動への適応に主眼を置いてきた「小1プロブレム」に新たな視点を提供することになろう。また、就学前の時点のいかなる要因が、移行期を通じての子どもの QOL の変化に関わるかを検討することは、当該時期の子どもの生活の満足度を支える要因を見出し、適応上の問題解消への取り組みに対する基礎的な情報を提供できるものと考えられる。

そこで本研究では、就学移行期における子どもの日常生活に関する状態像として QOL の発達について調査し、子どもにとって最も身近な環境である親側の要因との関連について検討する。特に今回は、先行研究(菅原, 2011, 2015; 榊原, 2011 など)を参考に、親自身の肯定感や精神的な安定を示す要因として、親の自尊感情と子どもへの養育態度に焦点をあて、子どもの QOL との関連について検討する。

方法

対象者

「子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト(酒井・眞榮城・前川・則定・上長・梅崎・田仲・高橋, 2012)」に登録している家庭(関東甲信越・関西・九州地域在住)のうち、対象児が年少(Wave1)、年長(Wave2)、小学1年生(Wave3)の各時点で実施した調査に参加した107家庭の母親が今回の分析の対象となった。対象児の性別は男子が54名、女子が53名であり、平均月齢は年長時(就学前)では76.82ヶ月($SD = 3.14$)、小学1年生時(就学後)では88.83ヶ月($SD = 3.36$)であった。対象児が年長時の母親の平均年齢は38.59歳($SD = 4.54$)であった。本調査の対象児は、2008年度生まれと2009年度生まれで構成されており、調査は、子どもが該当する学年になった際に、各年度の2月から3月にかけて一斉に実施した。

なお、本研究は首都大学東京の倫理委員会の承認を得て実施された。

調査内容

1. 子どもの QOL: 対象児が年長(Wave2)と小学1年生(Wave3)の両時点で、KINDL の幼児版である Kiddy-KINDL^R Parents' version (Ravens-Sieberer & Bullinger, 1998) の日本語版(根本・柴田・松崎・古荘, 2013)により子どもの QOL を測定した。なお、今回は縦断研究のため就学後の時点においてもこの幼児版を使用している。本研究では、オリジナルの46項目のうち、身体的健康(私の子どもは、元気いっぱいと感じているようだった他)、精神的健康(私の子どもは、楽しそうによく笑っていた他)、自尊感情(私の子どもは、自信があるようだった他)、家族(私の子どもは、私たち親とうまくいっていた他)、友だち(私の子どもは、友だちと仲良くしていた他)、学校(園)生活(私の子どもは、学校(幼稚園・保育園)生活を楽しんでいた他)の6下位領域を構成する24項目(各領域4項目ずつ)を使用し、「5. いつも」「4. たいてい」「3. ときどき」「2. ほとんどない」「1. ぜんぜんない」の5件法で回答を求めた。6つの下位領域とそれらを合計した QOL 全体のそれぞれについて、構成する項目間の内的整合性を表す α 係数を算出したところ、就学前後の順に、身体的健康では .55-.53、精神的健康では .70-.62、自尊感情では .81-.86、家族では .58-.60、友だちでは .74-.64、園(学校)生活では .67-.67、QOL 全体では .86-.84 であった。下位領域によってはやや低い α 係数が見られたが、先行研究(根本, 2014)にも同様の傾向が報告されていたことから、オリジナルと

同様の項目構成のまま使用することとした。

2. 親の自尊感情：対象児が年少時 (Wave1) に、Messer & Harter (1986) が作成した Manual for the Adult Self-Perception profile の Global Self Worth の項目を、原著者の許可を得て邦訳しバックトランスレーション後に使用した。本尺度は、「自分が気に入っている」等の6項目から構成され、「4. あてはまる」から「1. あてはまらない」までの4件法で回答を求めた。 α 係数は.76であった。

3. 親による子どもの養育態度：対象児が年長時 (Wave2) に、親の養育態度を、温かさ、権威的、放任的、体罰、主体性尊重の5つの側面から評価した。養育の温かさについては、PBI (Parenting Bonding Instrument; Parker, Tupling, & Brown, 1979) の邦訳改訂版 (菅原・酒井・眞榮城・小泉, 2000) を使用した。本尺度は、「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」に代表される5項目で構成され、「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。 α 係数は.86であった。権威的、放任的、体罰に関しては、RAISING CHILDREN CHECKLIST (Shumow, Vandell, & Posner, 1998) を邦訳した尺度 (菊池・松本・酒井・菅原, 2015) を使用した。権威的な養育は、「叱る前に、なぜそういうことをしたのか自分で説明するチャンスをあげていますか」に代表される一貫した統制方略と温かみのある良好な養育態度を表す5項目、放任的な養育は「自分のその日一日の予定を、子ども自身の好きなようにさせていますか」などの3項目、体罰は「本当に悪いことをしたとき、手をあげますか」などの2項目で構成され、「4. 全くその通りだ」から「1. 全く違う」までの4件法で回答を求めた。各因子の α 係数は権威的な養育が.77、放任的な養育が.63、体罰が.83であった。主体性尊重については、ベネッセ次世代研究所「妊娠出産子育て基本調査 (フォローアップ調査)」(2010) にて使用された8項目の中から主体性尊重に関わる4項目を選択・一部改訂し、使用した。本尺度は、「簡単なお願いやいいつけをして、うまくできたときに『よくできたね』などほめる声かけをした」、「自分でしようとしていることは、危険でない限り、できるだけ手を出さずに最後までやらせるようにした」、「一緒に絵本などを見たり読んだりした」、「ブロックの遊びかたや折り紙の折りかたなどのおもちゃの遊び方の見本を見せた」の4項目で構成され、過去一か月の間の実施頻度について、「5. ほとんど毎日した」から「1. ほとんどない」までの5件法で回答を求めた。主成分分析の結果、第一主成分への寄与率が57.28%であり、すべての項目の負荷量が.40以上であったため1因子構造と判断した。 α 係数は.75であった。

結果

就学移行期における QOL の発達的变化

子どもの QOL が就学前後でどのように変化するかを、6つの下位領域と全体のそれぞれについて比較した。各 QOL の比較は、松崎 (2014) に従い 100 点換算した値を用いて行った。100 点換算後の平均値・標準偏差を Table1 に示す。

QOL の6つの下位領域と全体それぞれについて、二要因 (就学前後×性別) の分散分析 (Table 1) を行ったところ、下位領域では自尊感情において性差の主効果が見られ、女子の方が男子よりも得点が高かった ($F [1, 105] = 8.073, p = 0.005, \eta^2 = 0.071$)。また、学校 (園) 生活では、就学前後の主効果 ($F [1, 105] = 6.209, p = 0.014, \eta^2 = 0.056$)、性差の主効果 ($F [1, 105] = 9.060, p = 0.003, \eta^2 = 0.080$) が有意であり、就学前よりも就学後の得点が低く、女子の得点は男子の得点より高かった。その他の領域の主効果や交互作用は有意ではなかった。QOL 全体を表す総得点では、就学前後の主効果 ($F [1, 105] = 6.253, p = 0.014, \eta^2 = 0.057$) が有意であり、就学前よりも就学後の得点が低かった。交互作用は有意ではなかった。

子どもの QOL に関わる親側の要因の検討

就学前後における子どもの QOL の発達的变化とそれに関わる要因を検討するため、共分散構造分析によるパス解析を実施した。今回は QOL 全体の変化に注目した。解析に先立ち、Table 2 に示した変数間の関連を見たところ、就学前後の子どもの QOL の間には 0.1% 水準で有意な関連が示された ($r = .60$)。また、就学前の QOL は、親の自尊感情 ($r = .28$)、養育の温かさ ($r = .24$)、権威的な養育 ($r = .28$) との間に 1% 水準で有意な関連が見られた。就学後の QOL は親の自尊感情 ($r = .42$)、権威的な養育 ($r = .36$) との間に 0.1% 水準で有意な関連が示され、養育の温かさ ($r = .28$)、主体性尊重 ($r = .28$) との間に 1% 水準で有意な関連が見られた。なお、すべての変数間の相関は付録 (Table3) に示した通りであった。

就学前後の子どもの QOL を軸として、QOL と有意な相関が示された就学前の親側要因を説明変数とし、各変数から 2 時点の QOL それぞれへのパスを引いたモデルを作成した。なお、子どもの性別と月齢の要因については統制した。パス解析の結果、モデルの適合度指標を確認したところ、 $\chi^2 (10) = 14.260, p = .161, CFI = 0.968, RMSEA = 0.033$ と、モデルのデータへのあてはまりがよいという結果が得られた。就学前の子どもの QOL から就学後の QOL へのパス ($\beta = .47, p < .001$) は正に有意であり、就学前の状態が小学

校に入学後も持続することが示された。また、就学前の親の自尊感情は同時点の子どものQOL ($\beta = .20, p < .05$) と就学後のQOL ($\beta = .23, p < .05$) へのパスのどちらもが正に有意であり、就学前の親の自尊感情が就学移行期を通じてQOLを高める要因であることが示唆された。親の養育態度に関しては、就学前の権威的な養育から同時点のQOLへのパス ($\beta = .20, p < .05$)、就学前の主体性尊重から就学後のQOLへのパス ($\beta = .20, p < .05$) がともに正に有意であった。このことから、就学前の養育が子どもの意見を聞き入れるものである場合には、同時点のQOLが高くなり、それが小学校入学後も維持されること、就学前の養育が子どもの主体性を尊重するものであることが、小

学生になってからのQOLの高さを予測することが示唆された (Figure1)。

考察

本研究は、就学移行期の子どものQOLの発達とその関連要因について検討することを目的とした。

まず、就学移行期におけるQOLの発達について検討した結果、子どものQOL総得点および6下位領域中の学校(園)生活の得点が就学後に有意に低下していることが示された。小学生を対象とし、子どものQOLの発達について横断的に検討した柴田・松崎(2014)は、QOL総得点・身体的健康・自尊感情・友

Table1 QOL総得点・6下位領域の二要因分散分析結果(就学前後×性差)

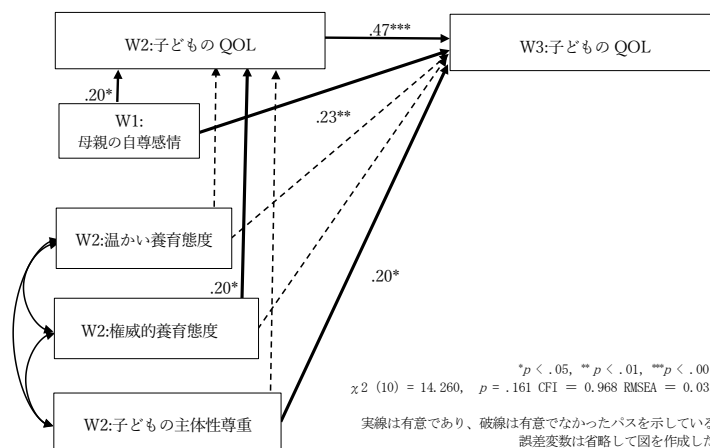
	就学前		就学後		F	p	η^2	主効果
	M (SD)		M (SD)					
	男児	女児	男児	女児				
身体的健康	90.33(11.67)	88.21(15.63)	86.32(15.56)	86.32(14.41)				
精神的健康	89.70(10.02)	90.82(12.42)	89.01(10.37)	88.80(11.46)				
自尊感情	73.03(10.98)	79.84(15.96)	71.41(13.00)	77.83(14.01)	8.07	0.01	0.07	女児>男児
家族	77.20(12.51)	76.89(12.77)	76.74(11.67)	76.88(12.83)				
友だち	82.87(13.53)	84.86(16.01)	80.79(13.01)	83.53(10.79)				
学校(園)生活	83.68(9.97)	87.62(12.71)	79.05(11.91)	85.25(11.61)	9.06	0.00	0.08	女児>男児
QOL総得点	82.63(6.64)	84.84(10.94)	80.52(8.15)	83.13(7.88)	6.21	0.01	0.06	就学前>就学後
QOL総得点	82.63(6.64)	84.84(10.94)	80.52(8.15)	83.13(7.88)	6.25	0.01	0.06	就学前>就学後

Table2 子どものQOLと親の自尊感情・養育態度の相関

	2	3	4	5	6	7	8
1 W2:就学前QOL総得点	0.60 ***	0.42 ***	0.28 **	0.36 ***	0.03	-0.15	0.28 **
2 W3:就学後QOL総得点		0.28 **	0.24 **	0.28 **	0.01	-0.03	0.08
3 W1:母親の自尊感情			0.16	0.16	-0.07	-0.17	0.09
4 W2:温かい養育態度				0.39 ***	-0.02	-0.34 ***	0.25 **
5 W2:権威的					-0.02	-0.18 *	0.36 ***
6 W2:放任						-0.01	-0.04
7 W2:体罰							-0.11
8 W2:子どもの主体性尊重							

W1:年少時, W2:年長時, W3:小1時

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



W1:年少時, W2:年長時, W3:小1時

Figure1 子どものQOLと母親の自尊感情・養育態度との関連

だち・学校生活の得点が学年とともに低下傾向にあったことを報告している。これらの結果から、幼児期から児童期における QOL 総得点は、評定者が子ども自身の場合においても親の場合であっても、発達に伴って低下する傾向を持つ可能性が示唆されたものと考えられる。就学移行期において QOL 総得点が低下した要因としては、下位領域の中で得点が有意に低下した学校(園)生活領域の影響が推測される。QOL 学校(園)生活領域得点の低下には、学習課題(宿題など)に対する取り組み姿勢を問う項目が含まれており、親の評定が就学前よりも厳しくなっていたことが関わっているのではないだろうか。また、子どもが学校に行くことを楽しみにしている様子が、幼児期と比して減少している可能性もあることから、就学移行期の QOL を支える要因としては、やはり学校生活領域得点の維持・促進が重要な課題となってくるものと言えよう。

小学校2年生から6年生を対象として横断的調査を行った柴田ら(2014)は、どの学年も自尊感情領域の得点が他の領域より低かったことと、学年が上がるにつれて自尊感情得点有意に低くなっていたこと、男子より女子の得点が低かったことを報告している。本研究においては、移行期前後における自尊感情領域得点の有意な低下は認められなかったが、柴田ら(2014)と同様に、自尊感情領域の得点が他の領域に比して低かったことから、自尊感情の低さが就学後の QOL 総得点の低下に影響を及ぼしていた可能性も推察される。なお、本研究では、自尊感情領域および学校(園)領域において、男児より女児の得点有意に高かった。幼児版 QOL 尺度(親用)を用い、幼児期の QOL について検討した研究(根本, 2013)では、学校(園)生活領域で女児が男児の得点を上回っていたことが報告されている。幼児期の子どもの発達に関する報告(文部科学省, 2015)からも、女児の知識・言語習得や行動統制面に関する親評価が男児より高いことが示されている。自尊感情領域には「私の子どもは、いろいろなことができると感じているようだった」という項目が含まれていることから、幼児期および児童期初期の身体・言語発達が男児よりも女児が高く評価されやすい傾向として、自尊感情評定にも反映されたのではないかと推察される。今後は子ども自身による評定も踏まえた検討が求められよう。

次に、就学前後における子どもの QOL の発達の变化とそれに関わる要因を検討するため、共分散構造分析によるパス解析を実施した。その結果、就学前期における母親の自尊感情と子どもの主体性を尊重する養育態度が就学後の子どもの QOL に関連していることが示唆された。先行研究(菅原, 2011, 2015; 榊原, 2011)と同様に、本研究においても、幼児期の子

どもを持つ母親の自尊感情の高さが、就学後の子どもの QOL の維持・促進にポジティブな影響を及ぼす可能性を持つことから、できるだけ早い段階から子育てに関する母親の不安要因を取り除き、母親の精神的健康の改善を試みておくことは、子どもの QOL への間接的な支援として有効に働く可能性を示唆するものと考えられる。また、就学時期を目前にした子どもを持つ親にとって、就学移行期に伴う大きな不安要因の一つに、「小1の壁(内閣府, 2015)」が挙げられる。「小1の壁」とは、放課後や小学校の長期休暇中に安心して子どもを預けられる先を確保することに関して、保護者が遭遇する適応困難状態を指しており、「小1の壁」の打破を目的とした「放課後子ども総合プラン(内閣府, 2015)」をはじめとする取り組みがより充実していくことは、親の精神的健康の向上に寄与する可能性があり、間接的に子どもの QOL の発達にもつながっていくのではないだろうか。

さらに、本研究から、子どもの QOL の発達に子どもの主体性を尊重する養育態度が関連していたという結果が得られたことは、「小1プロブレム」を予防する家庭教育について検討する基礎的資料を提供することにつながるのではないかと考えている。例えば、幼児期の子どもを持つ親に対して、子どもの主体性を尊重する態度の具体例(「うまくできたときに『よくできたね』などほめる声がけをする」、「自分でしようとしていることは、危険でない限り、できるだけ手を出さずに最後までやらせるようにする」、「一緒に絵本などを見たり読んだりする」、「ブロックの遊びかたや折り紙の折りかたなどのおもちゃの遊び方の見本を見せる」)を紹介し、同時に、このような親の働きかけが、就学後の子どもの QOL に関わってくる可能性を持つことに触れる、といった形で本研究結果を活用していく方法についても検討していきたい。

今後の課題

今回は母親のみを対象として、移行期における子どもの QOL に直接的・間接的に関連する要因について検討した。今後は、調査対象者を増やし、父親から得られたデータも含めて、親子性別組合せを考慮した検討や、社会経済的背景要因を含めた詳細な検討を行っていく必要があるものと考えている。

(引用文献)

- ベネッセ次世代研究所. (2010). 第1章 1歳児期の親のかかわりと愛着関係. 第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査(1歳児期)報告書. 14-23.
- 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子(編著). (2014). 子どもの QOL 尺度その理解と活用. 診断と治療社.

菊池知美・松本聡子・酒井厚・菅原ますみ (2015). 母親に抱える保育施設との相談: 就学後の子どもの問題行動との関連プロセス. チャイルド・サイエンス, 11, 6670.

Landgraf, J.M., Abetz, L. and Ware, J.A. (1996). The CHQ User Manual. The Health Institute, New England Medical Center, Boston.

松崎くみ子. (2014). 「小学生版 QOL」「中学生版 QOL」の使い方. 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子 (編著) 子どもの QOL 尺度その理解と活用. 診断と治療社. 122-123.

Messer, B. & Harter, S. (1986). The self-perception profile for adults: Manual and Questionnaires.

文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領解説 生活編. 日本文教出版.

文部科学省. (2015). 子供の発達の現状. 幼児教育, 幼小接続に関する現状について. 教育課程企画特別部会 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afidfile/2015/05/25/1358061_03_01.pdf

内閣府. (2015). 平成 27 年度版. 少子化社会対策白書. <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2015/27webhonpen/index.html>

根本芳子・柴田玲子・松崎くみ子・古荘純一. (2013). 日本における Kiddy-KINDL Questionnaire 「幼児版 QOL 尺度親用」の検討. 子どもの健康科学. 13 (2), 17-26.

大前曉政. (2015). 小1 プロブレムに対応する就学前教育と小学校教育の連携に関する基礎的研究. 人間学研究, 15, 19-32.

Ravens-Sieberer, U. & Bullinger, M. (1998a). Assessing the health related quality of life in chronically ill children with the German KINDL: first psychometric and content-analytical results. Quality of Life Research, Vol. 4, No 7.

酒井厚・眞榮城和美・前川浩子・則定百合子・上長然, 梅崎高行・田仲由佳・高橋英児. (2012). 子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト (1): 養育者の子育てサポートネットワークと養育態度および幼児の問題行動との関連. 教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 402.

榎原洋一. (2011). 生育環境とその格差が子どもの生活の質と精神的健康に及ぼす影響. <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21402044/21402044seika.pdf>

柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子・田中 大介・川口毅・神田晃・古荘純一・奥山真紀子・飯倉洋治. (2013). 日本における Kid-KINDLR Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討 日本小児科学会雑誌 107 (11), 1514-1520.

柴田玲子・松崎くみ子. (2014). 第 1 章 基礎編 7 QOL 尺度の実用化. 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子 (編著). 子どもの QOL 尺度その理解と活用. 診断と治療社. 29-37.

柴田玲子・松崎くみ子・根本芳子. (2014). 子どもの健康関連 QOL の測定 -KINDLR QOL 尺度の実用化に向けて- 聖心女子大学論叢. 122, 27-52.

新保真紀子. (2001). 「小1 プロブレム」に挑戦する 子どもたちにラブレターを書こう 明治図書

菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・小泉智恵. (2000). 青年前期における不適応行動の出現と家族ダイナミクスとの関連 安田生命社会事業団研究助成論文集. 36, 96-102.

菅原ますみ. (2011). 第 6 章 家族の QOL の特徴 第 2 回 妊娠出産子育て基本調査 (横断調査) 報告書. ベネッセ教育総合研究所報. vol.9.106-117.

菅原ますみ. (2012). 子ども期の QOL と貧困・格差問題に関する発達研究の動向. 菅原ますみ (編著) お茶の水女子大学グローバル COE プログラム 格差センシティブな人間発達科学の創成 1 巻: 子ども期の養育環境と QOL. 金子書房. 145-165.

菅原ますみ. (2015). クオリティ・オブ・ライフと子ども期の発達—妊娠期から青年期まで— 日本小児看護学会誌. vol.24 (3) .56-63.

Shumow, L., Vandell, D. L., & Posner, J. K. (1998). Harsh, firm, and permissive parenting in low-income families. Journal of Family Issues, 19, 438-507.

Table3 変数間相関

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 W2:身体的健康	0.47 ***	0.23 **	0.28 **	0.25 **	0.24 **	0.60 ***	0.32 **	0.46 ***	0.32 **	0.22 *	0.24 *	0.15	0.45 ***	0.12	0.02	0.24 **	0.09	0.08	0.12
2 W2:精神的健康		0.38 ***	0.43 ***	0.46 ***	0.38 ***	0.76 ***	0.12	0.43 ***	0.21 *	0.18	0.22 *	0.25 **	0.36 ***	0.17	0.22 *	0.20 *	-0.06	-0.04	0.04
3 W2:自尊感情			0.20 *	0.46 ***	0.32 ***	0.66 ***	0.13	0.45 ***	0.59 ***	0.19	0.45 ***	0.37 ***	0.56 ***	0.28 **	0.14	0.16	-0.03	0.05	0.12
4 W2:家族				0.39 ***	0.36 ***	0.66 ***	0.21 *	0.39 ***	0.13	0.47 ***	0.14	0.08	0.36 ***	0.26 **	0.43 ***	0.32 ***	0.06	-0.19 *	0.00
5 W2:友だち					0.48 ***	0.75 ***	0.05	0.25 **	0.29 **	0.21 *	0.55 ***	0.22 *	0.40 ***	0.16	0.19 *	0.13	0.00	-0.05	0.10
6 W2:学校(園)生活						0.66 ***	0.04	0.15	0.23 *	0.20 *	0.35 ***	0.29 **	0.32 **	0.12	0.04	0.12	-0.12	-0.02	-0.01
7 W2:QOL総得点							0.22 *	0.51 ***	0.44 ***	0.36 ***	0.49 ***	0.33 **	0.60 ***	0.28 **	0.24 **	0.28 **	0.01	-0.03	0.08
8 W3:身体的健康								0.35 ***	0.23 **	0.23 **	0.13	0.07	0.53 ***	0.20 *	0.03	0.04	-0.01	-0.02	0.09
9 W3:精神的健康									0.43 ***	0.49 ***	0.38 ***	0.33 ***	0.74 ***	0.31 **	0.23 *	0.26 **	0.08	-0.09	0.14
10 W3:自尊感情										0.31 **	0.40 ***	0.38 ***	0.73 ***	0.29 **	0.11	0.28 **	0.09	-0.06	0.24 **
11 W3:家族											0.17 *	0.29 **	0.64 ***	0.33 ***	0.40 ***	0.38 ***	0.06	-0.32 ***	0.26 **
12 W3:友だち												0.42 ***	0.63 ***	0.28 **	0.17	0.17	0.01	-0.06	0.09
13 W3:学校(園)生活													0.63 ***	0.24 *	0.15	0.24 **	-0.11	-0.04	0.27 **
14 W3:QOL総得点														0.42 ***	0.28 **	0.36 ***	0.03	-0.15	0.28 **
15 W1:母親の自尊感情															0.16	0.16	-0.07	-0.17 *	0.09
16 W2:温かい養育態度																0.39 ***	-0.02	-0.34 ***	0.25 **
17 W2:権威的																	-0.02	-0.18 **	0.36 ***
18 W2:放任																		-0.01	-0.04
19 W2:体罰																			-0.11
20 W2:子どもの主体性尊重																			

W1:年少時, W2: 年長時, W3:小1時

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$